

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 談話室 白居易の遺跡を訪ねて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 波戸岡, 旭, Hatooka, Akira メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000136">https://doi.org/10.57529/00000136</a>

# 白居易の遺跡を訪ねて

波戸岡 旭

昨夏八月初旬、洛陽に旅した。白居易の遺跡調査のためである。白居易は七十五歳で歿するまでの晩年の十八年間を洛陽で過ごし、洛陽の龍門の香山寺に葬られたことが分かっている。古都洛陽の、東周・東漢・六朝・唐代等の遺跡もさることながら、主に白居易の居宅地及び香山寺遺跡を訪ねての旅である。旅の間は、珍しく天候に恵まれ、雨後の爽やかな六日間であった。

龍門の西山石窟の対岸には、香山寺と称する堂々たる伽藍、その近くには白居易の墓と称する立派な墳墓があるのだが、周知の通り、これらは清朝政府が定めたもので、まったく史実とは異なるものである。近年の調査によって、実際の寺院遺跡はそこから数km離れた地であることが分かっており、そこは荒地のまま、土塀の礎などが僅かに残っているだけである。また、白居易の墓所は不明としかないようである。清朝時代に、謂われのない寺院を香山寺と称し、無縁の墳墓を白居易の墓と定めたのは、おそらくそれらが観光地龍門石窟に至極近い所であったからで極めて杜撰、迷惑千万なことである。

一方、白居易の住居跡は、唐代洛陽の履道里（現在の安楽郷獅子海村）にある。一度、発掘が行われて復元の計画もあったそうであるが、予算が立たず、現在は自動車教習所になっていた。殺風景なトタン囲いであったが、洛水からの距離感覚など住居の位置が分かっただけでも、訪れた甲斐があった。なまじ妙な復元物があるよりもましなのである。トタンの塀にぶら下がっている南瓜の花もかえってゆかしい感じがした。建造物はなくともその位置感覚が体感できればいいのである。その場に立てば想像がより膨らむのであるから。

ところで、洛陽の旅では、洛陽郊外の北邙山を見ることがもうひとつの私の念願であった。古来、しばしば漢詩文に

詠まれてきたこの墓山の姿を目にしたく、また登って見たかったのである。紀元零年前後頃の作で、五言詩の詩母と称される「古詩十九首」に「車を上東門に駆り 遙かに郭北の墓を望む 白楊何ぞ蕭蕭たる 松柏広路を夾む 下に陳死の人有り 香香として長暮に即く（下略）」とある「郭北の墓」がそれである。古来、王侯公卿が葬られ、多くの詩人に詠まれた山である。日本だと京の鳥辺山に相当する墓山であるが、規模が違うことは言うまでもない。

北邙山は、洛陽の都心からは遠く霞んでいたが、近づいてみると標高三百mほどの緑滴の岡が延々と連なる丘陵地帯であった。その北邙山の塔にも登り、山の頂上にも立ってみた。ここは数知れない墳墓がいまもみな清浄に守られ続けているように思えた。白居易もこの北邙山を詩に多く詠んでいる。「何事か随はざらん東洛の水 誰家か又葬る北邙の山（人はこの世に生まれて洛水が流れ去るようにこの世を去り、みな北邙山に葬られるのである、の意）」はその一例。白居易は、閑適の境地を求めて、北宗禪・南宗禪・浄土信仰・弥勒信仰などの仏教に傾倒し、晩年、親友元稹の遺産を享けて、これを全部寄進して香山寺を補修し、自ら香山居士と称した。それゆえ白居易は歿後北邙山ではなく、香山寺の側に埋葬されたのであった。洛陽の街の変貌ぶりは凄まじいが、北邙山と洛水とだけはいくらかは古の姿を留めているように思えた。実際の地を踏めば、詩文の味わいが深まることは確かであり、また解釈が正されることも少なくない。洛陽時代の晩年の白居易の詩の研究に大いなる刺戟を享けた旅であった。

白居易の調査の旅の話のついでに「香炉峯」のことに触れておこう。「遺愛寺の鐘は枕を敬てて聴き、香炉峯の雪は簾を撥げて看る」で有名な香炉峯は、江西省の廬山にある峯だが、じつは廬山には北と南とふたつ香炉峯があり、どちらもその名のとおり香炉のかたちをしている。「枕草子」の「香炉峯の雪」は、むしろ白居易の詩によるが、これは北の香炉峯である。そして盛唐の李白が「日は香炉を照らして紫煙を生ず 遙かに看る瀑布の長川を掛くるを 飛流直下三千尺 疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるか」と詠んだのは、南の香炉峯である（ただし異説あり）。このふたつの峯は、連山をなす巨大な廬山の南北の真反対にあつて、よほど離れた山から眺めてみたのであったが、その隔たりは視界に納まりきらなかった。李白が詠んだ南の香炉峯の側には三千尺ならぬ三百尺（九十m）の瀑布が今も轟轟と流れ落ちている。白居易が草堂を結んだあたりには滝は見当たらなかった。

ついでに言えば、湖南省の衡山にも香炉峯の名の峯がある。なんのことはない、日本の何々富士ほどではないけれど、頂きが香炉の形をしていれば、それぞれの地で「香炉峯」と称したのであろう。（日本漢文学・日中比較文学）